

群 教 セ	G10 - 01
	平 16.218 集

「思いやりの心を伝え合う力」を育てる 道徳プログラムの開発

－ 「資料提示の工夫 + 体験活動」で作る

心に響く道徳授業をつなげて －

長期研修員 恩田 弘子

研究の概要

本研究は、思いやりの心を伝え合う力を育成する道徳教育はどうあるべきかを構想し実践した研究である。具体的には次の3点を主張して取り組み、効果を得た。

1. 子供の道徳的理解を促すために、段階を踏んだプログラムを組み、指導していくこと。
2. 各授業が子供の心に響くように、資料提示を工夫し、体験活動を組み込むこと。
3. 保護者の評価を指導に生かせるように、ワークシート・道徳通信を活用すること。

【キーワード：道徳 思いやり 評価 プログラム学習 コミュニケーション】

主題設定の理由

1 現代の社会問題及び教育課題から

全国の保護者・教員に対して行った学校教育に関する意識調査の多くに資料1のような結果が出ている。道徳教育によせる期待は大きく、特に人間関係を築く力、とりわけ思いやりの心をはぐくんでほしいという期待が大きいことがわかる。

また、現代は、核家族化・兄弟姉妹の数の減少・遊び場の喪失・地域社会の結び付きの希薄化等により、様々な年齢層の人と出会い、多様な

人間関係を築く機会が損なわれがちである。その上、インターネット、携帯電話の普及により、同年代の子供同士でも、「生身の人間として」つきあうのではなく、機械的な文字の交信のみのつきあいしかできなくなっている。

近年増加してきた不登校は、多くは「学校拒否」というよりも、「人間拒否」が原因していることが多い。(国立教育政策研究所生徒指導研究センター「不登校への対応と学校の取組について」より) 伝え合う力の不足のために人間関係を作ることができず、友達のささいな言動に敏感に反応し、傷つき心を乱す現代の子供たち。そんな弱さが、ふとした瞬間に理不尽な暴力や攻撃性に変わる事件も多発している。このような子供たちの起こす事件等を受けて、文部科学省は「児童生徒の問題行動対策重点プログラム(中間まとめ)」(平成16年8月)において、具体的対策の2つ目に「伝え合う力と望ましい人間関係の指導の推進」を挙げている。友達同士で、生身の人間として心を通い合わせて、思いやりの心を伝え合う力を学校で計画的に育てていく必要があると述べられている。

資料1 学校教育に関する意識調査(全国)

全国の保護者・教員の意識

○学校教育に関する意識調査(平成15年度文部科学省)では
学校生活で身につけてほしいこと(保護者・教員)

第1位「友達を作り、自分のまわりの人々などと仲良くつきあったりするなど社会の一員として必要な能力」

○幼児の親の意識調査(平成16年ベネッセ)では
小学校に望むこと

第1位「思いやり・道徳心を育てる」

○学校教育に関する調査(平成15年度ベネッセ)では
学校教育目標として取り上げている項目として

第1位「心の教育・豊かな心」第3位「思いやり」

2 従来の道徳教育の問題点から

前項で述べた課題が生じるのは、従来の道徳教育に不足している部分があるからと考えた。それは、体験と道徳的価値との結び付け方である。

従来も、体験の重要性が叫ばれ、他教科・領域等の体験と道徳の時間を結び付け、複数の道徳の時間を積み重ねて行う総合単元的な道徳学習などが推進されてきている。しかし、実際には、道徳の時間に気づいたことを体験するまでに、時間的な隔りがあり、子供の意識が途切れてしまっていたのではないだろうか。道徳の時間において、話し合い、考え、気づいたことを、その場で表出する体験も積み重ねていく必要があると考える。子供は実際に五感を使って体験することにより、気づきが生まれ、心を大きく育てていくものである。そこで、道徳の時間の中で思いやりの心を伝え合う経験・体験を積み重ねることにより、伝え合う力を身につけ、心の中もさらに豊かに育てていけるのではないかと考える。

協力校の子供たちの実態からも、思いやりの心がないわけではないが、優しい気持ちを伝え合う力の不足を感じる。それは、思いやりの心とは何かと意識したことがないことや、心の伝え方には様々な方法があるということを理解していないことが原因として考えられる。

以上のことから、道徳の時間内にも子供の実態に合わせて体験活動を取り入れ、スモールステップを踏んだ道徳プログラムを組み、思いやりの心と同時に伝え合う力を意図的・計画的に育てていくことが、これからの道徳教育において必要であると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

「思いやりの心を理解する 心を伝え合う方法を学ぶ 思いやりの対象を広げる」というステップを踏んだ道徳プログラムを組み、各時間には、資料提示と体験活動の工夫を取り入れて子供たちの心に響く授業を構想する。この道徳プログラムにより道徳教育を進めれば、子供たちに思いやりの心を伝え合う力を育てることができることを、実践を通して明らかにする。

研究の見通し

以下の1～3を並行して行うことにより、子供たちに思いやりの心を伝え合う力を育てることができるであろう。

- 1 「思いやりの心を理解する 心を伝え合う方法を学ぶ 思いやりの対象を広げる」というステップを踏んだ道徳プログラムを構想し、実践することにより、道徳的理解を促すことができるであろう。(見通し1)
- 2 各授業において、資料活用の工夫と体験活動の工夫を取り入れることにより、子供にとって魅力ある心に響く授業となり、道徳的心情を高めることができるであろう。
(見通し2)
- 3 ワークシートや道徳通信・心のノートを活用し、子供及び保護者との意見交流を授業の評価に生かし、指導と評価の一体化を図ることにより、道徳的实践意欲や態度を育てることができるであろう。(見通し3)

基本的な考え方

1 「思いやりの心」とは

ここでいう「思いやりの心」は、「内容項目2 - (2)思いやり・親切」のみを指しているのではない。温かい人間関係のすべての源となる、「人の気持ちを考えてどうしたらよいかを思いめぐらす心」である。

2 「思いやりの心を伝え合える子供」とは

思いやりの心を伝え合える子供の姿を、次の(1)～(4)を満たしている子供ととらえた。

(1)「思いやりの心」とは何かを理解している

思いやりの心には「気遣う心」「励ます心」など様々な「 の心」があることを理解して意識できるようになっている。

(2)心の伝え方を理解している

心を通わす方法には言葉による方法のほかに、身振り手振り・表情・ぬくもり(いわゆるノンバーバルコミュニケーション)があることを知り、それらの要素が心を通い合わせるためにいかに重要か気付いている。

(3)表現力(表現意欲)を持っている

豊かな語いや流ちょうな表現ではなく、「心を通わせたいという気持ち」(表現意欲)を持っていること、そして、気持ちを素直に表現できるという力を持っている。

(4)心の中で思いやりの心が広がっている

自己肯定感をもち、身近な人から周りのあらゆる人へと思いやりの対象が広がっている。

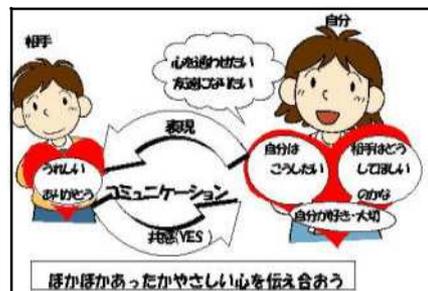


図1 思いやりの心を伝え合える人間関係

以上のことをまとめ、思いやりの心を伝え合える人間関係を図1のように考えた。

3 「道徳プログラム」とは

教科の学習と同様に、大きなねらいを達成するために単元を組み、単元のねらいに向かってステップを踏んで積み重ねて学習していくこと、また、各時間の導入に前時の学習を想起して復習することなどが、これからの道徳教育に必要な要件であると考えた。そのための道徳学習計画を道徳プログラムと呼ぶ。

子供に思いやりの心を伝え合う力を育てることは、意図的・計画的でなくては不可能である。思いやりの心を伝え合う力を育てるという大きな目的を達成するためには、子供の理解力や意識の流れを大切に、関連する内容項目をつないで、段階を踏んだ道徳プログラムで学習を積み重ねることが重要である。詳しくは「 研究の内容」で述べる。

4 「心に響く道徳授業」とは

子供たちにとって「心に響く」とは、その時に「いいな」「すごいな」「楽しいな」「その通りだな」とプラスに感じることであり、さらに「いつまでも心に残る」ことである。学んだ時には「そうか」と思っても、すぐに忘れてしまうようであれば道徳性の育成に結びつかない。真に子供たちに道徳性を育むためには、プラスに感じ学んだことを、いつまでも心に残せるような道徳授業を展開する必要がある。本研究では、具体的には、資料の選定・提示の工夫と、体験活動を授業に組み入れる工夫を通して、心に響く授業を構想していく。

研究の内容

1 道徳プログラムの構想

『「思いやりの心を伝え合う力」を育てる道徳プログラム』を下の表のように構想した。これは全学年に適応する基本形である。

ステップ	説明	子供の意識の流れ
0 道徳授業の大切さを知る	学年の始め：道徳オリエンテーション 全学年の道徳授業において、学年始めに道徳の時間の大切さや、道徳の時間の進め方について説明する	道徳の時間って大切なんだな。「わかちあいの約束」を守って楽しい道徳にしたいな。
思いやりの心を理解するきっかけ	プログラムの始め：プログラムオリエンテーション ブレーストーミング法やマッピング法により、価値に関わる概念を想起する。 プログラムのねらい（教師の願い）を伝える	「思いやり」ってなんだろう。自分と友達では、考え方が同じところもあるけど、違うところもあるんだな。思いやりの心を伝えられるようになりたいな。
心の伝え方を理解する	心を伝える方法には、ノンバーバルコミュニケーションがあることを体験により理解する。その方法を繰り返し体験していくことが効果的なので、プログラムの過程の最初に行う必要がある。	思っていることを伝えるのは大切なことなんだな。言葉以外に、身振り・表情・ぬくもりという方法もあるんだ。
表現力・表現意欲を持つ	心の伝え方を体験により理解したあと、表現力・表現意欲を高める道徳の授業を行う。	思っていることを伝え合うって気持ちいいな。もっともっと友達と心を通わせ合いたいな。
自己肯定感を高める（自分への思いやり）	他への思いやりの気持ちをもつには、自分を大切に思う心が基礎として必要である。自己肯定感を高めることは、全教育活動を通じて心がけていくことであるが、道徳の時間に特に意識して行うようにする。	自分は大変な存在なんだ。今のままの自分が好きだけど、もっとできるかもしれない。自分を大切にするために、一生懸命頑張ることも大切なんだ。
思いやりの心の対人への思いやりを広げる	自分以外の最も身近な存在の家族同士の思いやりの大切さをよく理解していることが必要である。家族愛を学習することは、自己肯定感を高めることにもつながる。 身近な友達に対して、「相手はどうしてほしいのか」を想像し、思いをめぐらすことによって、人の気持ちと行動についても理解を深めていけるようになる。 学年があがるにつれ、友達以外の人や、地域の人、だれに対しても同様の思いやりの行動がとれるようになることが大切である。	家族はとても大切な人たちだ。また、家族は1番自分を大切に思ってくれている。家族にも思いやりの心を表すことが大切なんだ。 相手はどうしてほしいんだろう。自分の気持ちを伝えていって、喜んでもらえるようにしたい。友達に優しくして仲良くしていきたいな。 だれに対しても思いやりの心を忘れずに接していきたいな。知らない人にも勇気を出して親切にしたい。

ステップ0のように、プログラムとは別に、学年の始めに道徳の授業についてのオリエンテーションを行うことが重要であると考えた。（道徳のオリエンテーションについては資料編の指導案を参照）

ステップ のようにプログラム学習の始めにはオリエンテーションを行う。

ステップ については、短学活等を利用して継続的に行っていく。

ステップ ~ については、各学年・子供の実態に適応する資料を選定して行う。

ステップ 「自己肯定感を高める」については、全過程を通じて行うようにするのが望ましいので、各道徳の時間内にも、自己肯定感を高められるような工夫を取り入れていく。

2 プログラムの構想の説明

ステップ 「思いやりの心」を理解する（理解をするきっかけ）

温かい人間関係のすべての源となる思いやりの心は、相手の気持ちを推測し、理解する心や、人の心に共感できるしなやかな心や、きまりを守ろうとする心などがある。思いやりの心は、ほとんどの内容項目の価値と関連があり、また、それらの基礎となっている。思いやりの心と道徳の内容項目との関連は、下の表のように考えられる。

また、各内容項目の表す心を、子供に理解できる言葉で表現して、言葉で理解させることが有効であるとする。例えば、「心のノート」の中に記述されている表現を使うと、わかりやすい。

内容項目	内容項目の価値と思いやりの心との関連	内容項目の表す心	心のノートの表現
1-(1) 節度・節制 自立	自分を制して節度ある生活をする事、特に低学年の「わがままをしない」という表現は他への思いやりにつながる。	自分でする心	かがやく自分になる心
1-(2) 思慮・反省	自分を振り返ることは、自分の気持ちの理解につながり、よく考えて行動することは、思いやりのある行動につながる。	よく考える心	
1-(3) 勤勉・努力	自分でやろうと決めたことをねばり強くやり遂げることは、自己肯定感を高め、自己を認めることにつながる。	一生懸命頑張る心	
1-(4) 勇気	思いやりの心を行動に移すには、お年寄りに席を譲るなど、大きな勇気が必要になる場合がある。	勇気を出す心	
1-(5) 誠実・明朗	誠実であるから自己を認めることができる。また、誠実さを外に向けて発揮することは思いやりにつながる。	正直な心	
2-(1) 礼儀	だれに対しても真心をもって接することは、思いやりの心そのものである。	礼儀正しくする心	人づきまになる心
2-(2) 思いやり 親切	この内容項目はすべての内容項目の基礎となる。	思いやりの心 親切にする心	
2-(3) 友情・信頼	友達とよく理解し合うことは自分の気持ち・相手の気持ちを意識し理解することである。 助け合うことはそのまま思いやりの行為である。	友達と助け合う心	
2-(4) 尊敬・感謝	尊敬や感謝の気持ちがあるから思いやる気持ちが生まれる。	ありがとうの心	
3-(1) 動物愛護	これはそのまま動植物に対する思いやりである。	自然を大切に する心	いのちを感じる心
3-(2) 生命尊重	生命あるもののすべてを大切にしようという気持ちは、そのまますべてのものに対する思いやりにつながる。	命を大切に する心	
3-(3) 敬けん	想像力や感性の育成を図ることにより、自他の気持ちを意識する心が高まり、思いやりを育てることにつながる。	美しいものに 感動する心	
4-(1) 公德心	他への思いやりの心があるからこそ、公德心が育つ。	やくそくや きまりを守る心	みんなと協力する心
4-(2) 勤労	生きがいをもって仕事に取り組むことは自己を認めること、自己理解につながる。	進んで働く心	
4-(3) 家族愛	これはそのまま家族に対する思いやりにつながる。	家族を大切に 思ふ心	
4-(4) 愛校心	みんなで協力し合って楽しい学級・学校を作ることは、学級・学校の仲間たちへの思いやりにつながる。	学校を大切に する心	

ステップ 思いやりの心の伝え方を理解する

ステップ 表現力・表現意欲を持つ

～子供の道徳性の表出について

子供の道徳性が表出するのは、「器に注いだ水がいっぱいになりあふれ出した状態」である。道徳性が十分育っているのに、表現の仕方がわからないため、この水を垂れ流しにしているという状態が存在している。それが、「気持ちはあるが表現できない」という状態であり、子供

たちの多くは、道徳性がないというより、こちらの状態の場合が多いと考える。そこで、道徳性が育ちあふれ出る前に、水を垂れ流しにしない方法を先に知らせておくことが重要であると考えた。そのため、「思いやりの心」を育て広げる授業よりも、表現力・表現意欲を育てる授業を先にプログラムに組む。

- ステップ 自己肯定感を高める
- ステップ 思いやりの心を伝える対象を広げる

思いやりの心を伝える対象として子供が意識するのは、まず身近な人間からである。また、人に対する思いやりを持つには、自分を大切にできる心や自分を認める心（自己肯定感）が基礎として存在する。このことから、思いやりの対象の広がり、図2のように、「自分 家族 身近な友達 その他の人たち」となっていくと考えられる。そこで、対象をこのように広げていくような授業のプログラムを組んでいく。

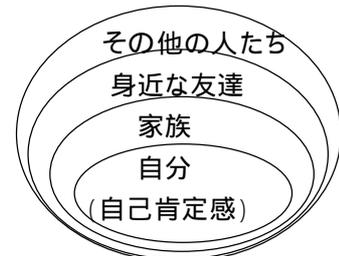
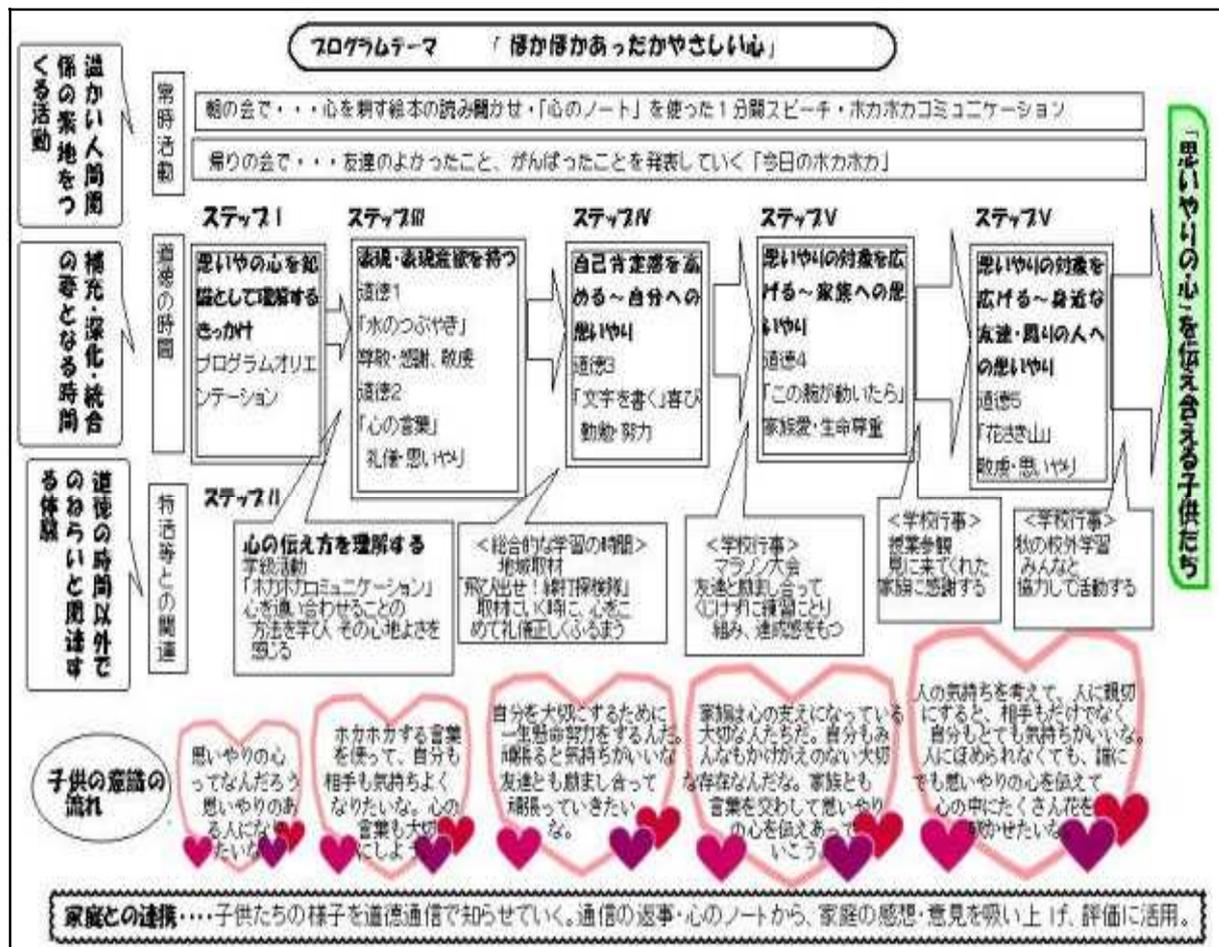


図2 思いやりの対象の広がり

3 小学校3年生おける実践プログラムの構想図

1の基本構想を基に、3年生に対して2学期に実践する場合のプログラムを、下の図のように構想した。「ほかほかあったかやさしい心」など、子供にわかりやすい表現でプログラムテーマを設けることで、教師の願いを伝えていく。また、他教科や特別活動と関連づけられるところは意識して関連づけて指導していくことで、子供の意識の流れをつなげていくようにする。



資料を切って提示（分割提示）

子供たちが主人公の考えや気持ちを真剣に考えられるように、資料を場面ごとに区切って提示したり、話の結末を伏せて提示したりする工夫をする。（図3参照）

視聴覚と心に訴える資料提示

資料の写真・映像・挿絵をプロジェクターを使いスクリーンに大写しにするようにする。また、BGMを用いるなど、視覚・聴覚に訴え、心に響かせる工夫をする。（図3参照）

(2)体験活動の工夫―群馬県の教育課題「体験活動を生かす」を受けて

日常の体験を生かす

「体験」というのは道徳のために特別な機会を設けて行う体験のみではない。他教科の活動中、学校行事中の体験や、普段の日常生活の中にも豊かな体験はたくさんある。そこで、図4のように日常の体験を生かした道徳の授業を考えたり、道徳の授業で学んだことを日常の体験に生かせるようにしていく。



図4 子供たちが日ごろ頑張っている様子の写真を活用

道徳の時間に体験活動を取り入れる

本研究では、道徳の時間内に体験活動を組み入れることを主張する。実際に体験することほど子供の心に響くことはない。道徳の時間に学んだ価値を実際に模擬的体験をすることや、また、逆に、模擬的に体験をしたことを通して価値を認識するような体験活動を道徳の時間に組み込んでいく。学級全員で同時に共通体験することにより、気持ちの共有ができることが非常に重要であると考えられるからである。本実践は具体的には下の表のような体験を取り入れる。

	主題	資料名	取り入れる体験活動	体験活動のねらい
道徳 ₁	言葉と 思いやり	水のつばや き	心が温かくなる言 葉を友達と言ひ合 う	頭で理解した良い言葉を、実際に使ってみるにより、その良さを美感する。
道徳 ₂	態度と 思いやり	心の言葉	思いやりの目隠し 歩き	頭で理解した心を通わせ合う方法を、実際に行ってみるにより、その良さを美感する。
道徳 ₃	息分けの 思いやり	文字を書く 喜び	口にペンをくわえ て文字を書く	星野さんの書き方を疑似的に体験することにより、いか に大変なことであるかを心から理解する。
道徳 ₄	家族への 思いやり	この腕が動 いたら	家の人からの手紙 を読み返事を書く	家の人との愛情を受けていることを知り、自分が大切な存 在であることに気づく。手紙を交換することの心地よさを 美感する。
道徳 ₅	無償の思 いやり	花さき山	学級の花さき山を 作る	うれしい気持ちを形に表すことにより、友達や自分の思 いやりの行為を意識し、その気持ちよさを美感する。

5 評価の工夫

(1)子供についての評価

子供の道徳性の評価については、下の表のような4つの項目及び観点が考えられる。本研究ではこの表のような評価方法をとる。

評価項目	評価の観点	評価方法
道徳的心情 (感じる心)	望ましい考え方やよりよい生き方 にどのような感情を持っているか	授業中の表情・発言・つばやき・ワークシートへの記述 ・心のノートへの記述 保護者の言葉(ワークシートへの記述)
道徳的理解・ 判断力(理解 し、判断する 力)	道徳的な知識をどの程度理解し、 善悪の判断を下す場面でのよう に思考し、判断するか	役割取得能力テスト(注1) ウェブマップ ワークシート 日常の行為・行動
道徳的実践意 欲・態度 (意欲や態度)	よりよく生きようとする意識や構 えがどれだけ育っているか	授業中の表情・発言・つばやき・ワークシートへの記述 ・心のノートへの記述 日記帳等への記述・普段の会話・つばやき
道徳的習慣・ 行為 (行為の表れ)	基本的な生活習慣などをどの程度 身につけているか、また望ましい 行為をどの程度実践できているか	日常の行為・行動 保護者の言葉(アンケート・連絡帳等への記述)

(注1 役割取得能力テストについては資料編を参照)

(2)指導の評価の工夫

評価をその後の指導に生かすため、次の ~ の方法で評価をとり、保護者や子供の心の啓発や次の授業の構想に生かしていく。

ワークシートの活用の工夫

図5のようなワークシートを作り、子供・教師・家庭を一つにつなぎ、指導と評価の一体化を図る。ワークシートは以下のように活用する。

左半分を授業中に使う。記述内容は価値にかかわる内容になっている。
 子供の記述にコメント（教師の評価）をつけて、その日のうちに子供に返す。
 家で右半分を記述する。子供の素直な反応（子供の授業への評価）がわかるように自由記述形式にする。
 子供が家の人に見せて、家の人の一言（保護者の授業への評価・子供への評価）を書いてもらい、学校に提出する。
 右半分の記述にコメント（教師の評価）をし、次の授業構想に生かす。
 ワークシートは各自のファイルにとじ込んでいく。

左半分 授業中に使う

右半分 宿題として使う

授業中の子供の記述
 子供たちが主人公の気持ちになって考えられるように吹き出しの形にする。
 記述する発問は1時間に1つにする。

授業についての自由記述欄
 印象に残ったことを記述させることで、授業評価に役立てる。

2) 家の人の一言之欄
 家庭で授業について話し合うきっかけとし、また、保護者からの授業の評価として活用する。

先生からの欄 一人一人の子供の言葉によりそってコメントをする。

1) こころの天気図 自由に心の中の様子を天気で表させ、授業の評価として活用する。

図5 ワークシートの例

1)こころの天気図について

これはカウンセリングの技法の一つで、自由な色を使って天気の様子を絵で描写することにより、心の様子を表すものである。回数を重ねると絵を描いている活動自体で効果を表すものであるが、今回はこれを道徳の時間の指導過程・指導方法の評価として使う。授業のワークシートに心の天気図を描かせて、一人一人の子供の心の変化を見て指導の評価に用いる。

2) 家の人の一言欄—群馬県の教育課題「家庭・地域との連携」を受けて

心の教育は学校だけでできるものではない。家庭・地域社会全体とのかかわりで行われるものである。なかでも、家庭の役割・影響は非常に大きい。そこで、学校と家庭は連絡を密に取り合い、協力していく必要がある。また、家庭と学校はお互いの意見に誠実にこたえていくようにすること、お互いの教育活動に吸い上げて反映していくようにしていくことが重要である。こうして、家庭と学校間で心を通い合わせようとする姿勢がそのまま、子供たちに心の通い合う人間関係を育てることにつながっていくと考える。そのためにも、ワークシートにこういった欄を設け、活用していく。

道徳通信の活用—群馬県の教育課題「家庭・地域との連携」を受けて

子供や保護者からの評価を生かすために、図6のような道徳通信で、教師の考え・授業の概要・子供の変容の様子とともに、子供と保護者の記述を紹介していく。家庭への啓発を促すとともに、家庭間の交流の場としても活用できると考える。



図6 道徳通信の例

その他

・心のノートの活用—群馬県の教育課題「心のノートの活用の工夫」を受けて

心のノートの子供の記述に対する意見・感想を保護者に記述してもらい、家庭からの評価を得る機会とする。

・道徳アンケートの実施

プログラムの指導前後に家庭に向けてアンケートをとり、家庭の願いを吸い上げ、

プログラム構想に反映させる。

・**参観者からの授業評価カード**

可能な限り同僚の教師に授業を見てもらい、カードに記入された授業評価を、次の指導に生かしていく。

以上の方法を取り、図7のようなプログラムの評価計画を立て、指導と評価の一体化を図る。

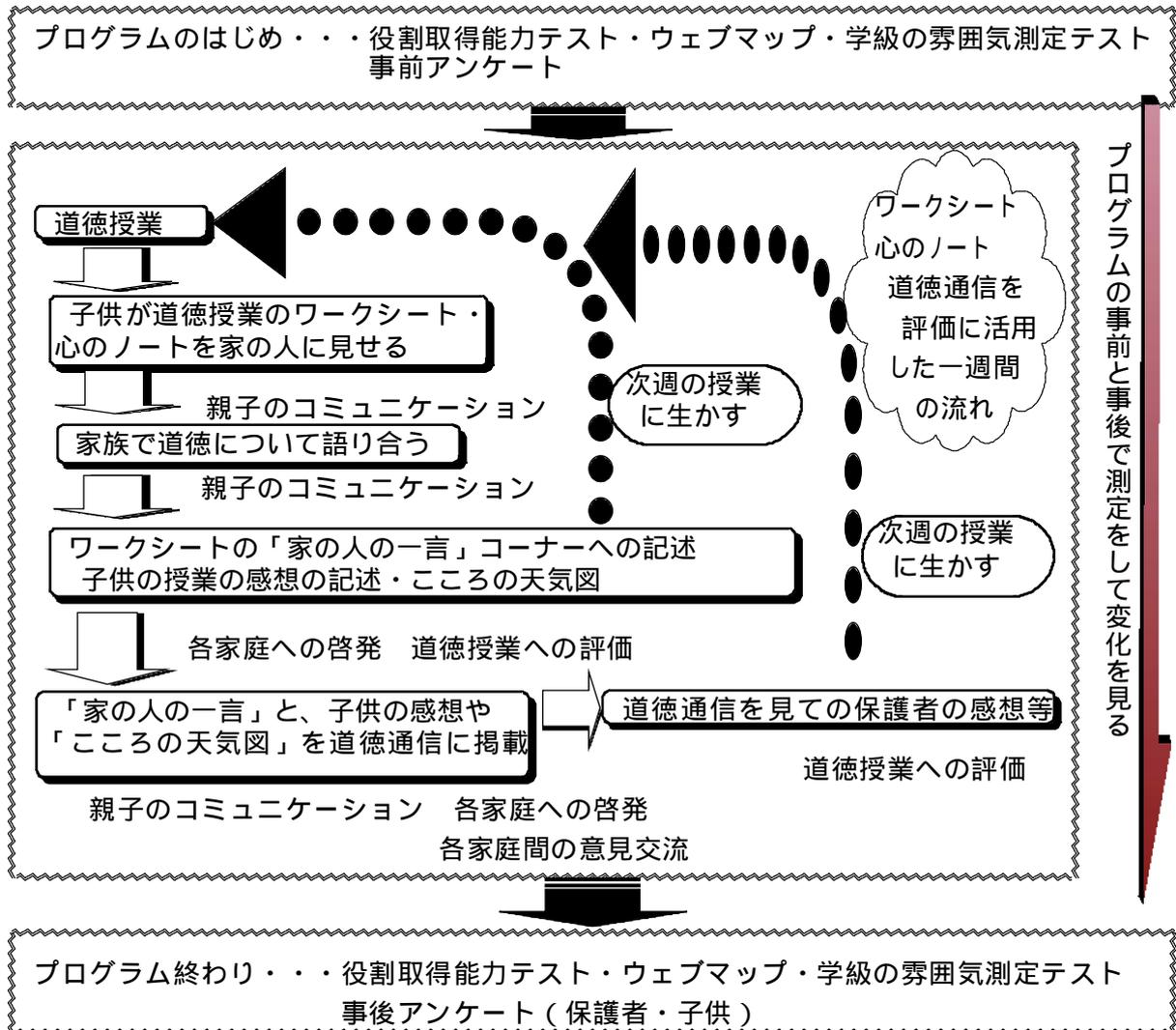


図7 指導と評価の一体化を図る評価計画

実践の概要及び結果と考察

次の2つの見通しについては一緒に検証する。

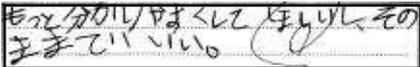
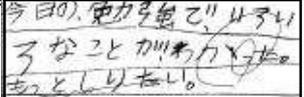
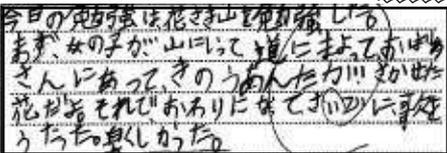
- 1 「思いやりの心を理解する 心を伝え合う方法を学ぶ 思いやりの対象を広げる」というステップを踏んだ道徳プログラムを組んだことにより、子供の道徳的理解を促すことができたか。(見通し1)
- 2 各授業において、資料提示の工夫と体験活動の工夫を取り入れたことにより、子供にとって魅力ある心に響く授業となり、道徳的心情を高めることができたか。(見通し2)

(1)実践プログラムの指導の流れ・概要・学級全体の様子・抽出児童の反応と変容

時	題材	板書・掲示物の工夫	資料選定・提示の工夫
ステップ 朝の会	プログラム オリエンテー ション		<p>プログラムオリエンテーションで提示した「ほかほか人間関係の図」を毎時間提示し、プログラムのねらいを確認する。</p> <p>「の心」と書いたハートマークを毎時間積み重ねてふやし、思いやりの心の概念を徐々に広げる。</p> <p>ホカホカコミュニケーションで掲示した「気持ち伝え合う方法」を、次の授業でも内容にかかわる具体的場面で活用する。</p>
ステップ 帰りの会	ホカホカコ ミュニケー ション		
ステップ	道徳授業1	水のつばやき 	<p>「水からの伝言」という写真集からプレゼンテーションを作り、提示した。</p> <p>「水くんのお話」という自作資料を作り、子供の声で録音をしたものをプレゼンで提示した。</p>
	道徳授業2	心のことは 	<p>場面絵のみを提示し、話をゆっくりと語り聞かせた。</p> <p>場面設定に必要な部分以外は省略する等、既存の資料を改作して提示した。</p>
ステップ	道徳授業3	文字を書く喜び 	<p>既存の資料「文字を書く喜び」を子供の実態に合うように改作して提示した。</p> <p>写真を見せながら、資料を切って少しずつ語り聞かせた。</p> <p>最後に星野さんについて、3分間に編集したビデオを見せた。</p>
ステップ	道徳授業4	この腕が動いたら 	<p>星野さんの書いた詩の一部を隠して提示し、どんな文が入るか考えさせた。</p> <p>資料はプロジェクターでプレゼン形式で提示した。</p>
	道徳授業5	花さき山 	<p>「花さき山」の絵本の原画をそのままプレゼンにし、スクリーンに映し出して、BGMとともに、物語をゆっくりと語り聞かせた。</p> <p>必要のない部分は省略して短くした。</p> <p>最後の場面は切って、あとから提示した。</p>

徐々に増えていくハートマーク

今まで勉強してきた思いやりの心のハートマークを、花さき山の花に重ねる

授業中の体験活動	学級全体の反応	抽出児童の反応・変容
<p>ホカホカコミュニケーション</p>  <p>・でくマツ 心もサー を通わジを わせ態し 合っ度あ うっ表い 体験情ぬ</p>	<p>板書した内容の他の概念をウェブマップに書けた子は全体の4分の1だけで、その概念の数も1つか2つだけである。</p>	<p><抽出児A男について> アセスメントテスト得点は1.5(学級平均1.65,期待値1.8)であり、役割取得能力は低い。文字、文を書くのは苦手であり、最初のウェブマップは右のように板書したのもも写し取れない状態である。乱暴がもとで、友達とのトラブルを起こしやすい。友達のことをばかにする言動をとったりする。</p> 
<p>水に感謝の言葉をかけてから席を移動し、隣の席の子に感謝の言葉をかける活動。</p> 	<p>「えー」と言いながらも楽しそうに行う。「気持ち良かった」という感想が多い。</p>	<p>隣の子の肩もみをするのをいやがり、教師が励ましの声をかけたが結局やらない。何でこんなことをやるのか、というような表情をしていた。</p>
<p>多くの子が、上手に気づいて連れて行ってあげていた。体験後の全体の学級雰囲気はホカホカしていて、満足感が表れていた。</p>  <p>思いやりの目隠し歩き「ぬくもり」と「態度」で気持ちを伝える体験をする。</p>	<p>写真の違いに驚き、引き込まれていた。一生懸命水に声をかけていた。隣の子への声かけは、まだ形式的な子がいる。</p>	<p>前半、チクチク言葉を書くのに非常に張り切り、「バーカ・まぬけ・アホー・うざい・しね」等、汚い言葉がどんどん出てくる。ホカホカ言葉は書けない。後半、「何て言えばいいんだっけ」と黒板にはられたホカホカ言葉を見ながら、一生懸命水に声をかける。</p> <p>多くの子が、上手に気づいて連れて行ってあげていた。体験後の全体の学級雰囲気はホカホカしていて、満足感が表れていた。</p> 
<p>星野さんのやり方で文字を書く体験をする。日ごろ子供たちが頑張っている様子の写真を提示する。</p> 	<p>星野さんの話に引き込まれていた。「自分で書いてみて初めて『すごく大変・つらい』という事がわかった」という反応が多い。</p>	<p>星野さんの話に非常に興味を持ったらしく、真剣な表情で話を聞く。星野さんの追体験をする時も、ふざけることなく真剣に取り組む姿が見られた。授業中のワークシートの記述がとても良いので、意図的指名をして発表させたところ、はにかみながらもうれしそうである。授業後の感想に右のように、「もっと知りたい」ということを書いてくる。</p> 
<p>家の人からの手紙をすべての子供が非常にうれしそうに読み、涙ぐむ子も多かった。返事を真剣に書き、短時間に5枚も書きあげる子供もいた。</p>  <p>読み、手紙の返事を</p>	<p>資料の中に、星野さんがお母さんに向かって「くそばあ!」と言う場面が出てくる。「くそばあって言っちゃうことある人?」という問いに6人挙手があり、その中にA男もいた。しかし、「言った後嫌な気持ちになる」と神秘的態度である。手紙を読み、非常にうれしかったらしく、普段文字を書くのが嫌いなA男が、集中して丁寧な字で返事を書いてきた。「お父さんからもらったけど、お母さんにも返事を書きたい」と言って、合計4枚の手紙を書き上げた。</p>	<p>資料の中に、星野さんがお母さんに向かって「くそばあ!」と言う場面が出てくる。「くそばあって言っちゃうことある人?」という問いに6人挙手があり、その中にA男もいた。しかし、「言った後嫌な気持ちになる」と神秘的態度である。手紙を読み、非常にうれしかったらしく、普段文字を書くのが嫌いなA男が、集中して丁寧な字で返事を書いてきた。「お父さんからもらったけど、お母さんにも返事を書きたい」と言って、合計4枚の手紙を書き上げた。</p>
<p>自分たちの日常体験をふり返り、学級の花さき山を作る。</p> 	<p>物語に引き込まれていた。花さき山の花を夢中になって作り、花を張り終えたあとの顔が皆満足で嬉しそうである。</p>	<p>花を作る時間は限られており、1枚作るのがやっとという時間の中、A男は張り切って2枚作り、満足そうにする。授業後の感想を右のように以前より長く書いてきたことと、「楽しかった」という言葉にも、A男の心の変容がはつきりあらわれている。</p> 

(2) 結果と考察

前ページの表中、抽出時A男の記録から考察する。

「水のつばやき」の授業でのA男の反応から、A男はホカホカ言葉（心が温くなる言葉）というものはどういうものがあるのか知らなかっただけだということがわかる。

「心の言葉」の授業でのA男の反応から、今まで体験したことのない不思議な感覚（心地よい感覚）を覚えたのだが、その自分の感覚を理解できないでいるため、何と表現したらいいかわからず、「わかりやすくしてほしい」という書き方をしたと考えられる。

「文字を書きたい」の授業から、A男の記述に変化が現れた。この授業後の「もっと知りたい」という感想は、A男にとっては、満足感を表す精一杯の表現であると考えられる。

「この腕が動いたら」の授業で家の人からの手紙を読んで、「家の人がこんなに自分のことを思っていてくれたなんて初めて知った」とつばやき、A男は大きく変わった。

「花さき山」の授業で、友達に親切にした経験、してもらった経験を書くということは、以前のA男であれば、容易な事ではなかったと思われる。しかし、実際にはA男は限られた時間内に2枚の花を作り、満足そうな表情を見せた。そして、授業の感想は今までになく長い文章を書いてきた。

図8は、プログラムの前と後のA男のウェブマップである。

「思いやりの心」の概念が随分と広がっている。また、楽しんで書いていることがわかる。また、役割取得能力測定テストの結果は、1.5から期待値の1.8になった。これは、段階を踏んで、プログラムの中で少しずつ思いやりの心を学んでいったから理解できたためと考えられる。

プログラム終了後には、A男は資料4のような感想を書いた。用紙いっぱい書いた文章の長さにも満足感が表れている。そして、最後の方にある、「これからこのちょうしてどんどん黒い紙にはっていききたい」というの、思いやりの心を伝え合っていきたいという気持ちの表れである。また、最後の「先生ありがとうございます」に、読む人の気持ちを考えた心遣いと、感謝の心の大切さの理解が表れている。

以上のことから、ステップを踏んだ道徳プログラムによる学習は、道徳的理解を促すのに有効であり、体験を取り入れるなどの授業の工夫は、子供の心に響き、道徳的心情を高めるのに有効であったと言える。



図8 A男の思いやりの心の概念の広がり

資料3 プログラム実践後のA男の感想文

「先生ありがとうございます」に、読む人の気持ちを考えた心遣いと、感謝の心の大切さの理解が表れている。

「これからこのちょうしてどんどん黒い紙にはっていききたい」というの、思いやりの心を伝え合っていきたいという気持ちの表れである。

「先生ありがとうございます」に、読む人の気持ちを考えた心遣いと、感謝の心の大切さの理解が表れている。

「先生ありがとうございます」に、読む人の気持ちを考えた心遣いと、感謝の心の大切さの理解が表れている。

3 ワークシートや道徳通信・心のノートを活用し、子供及び保護者との意見交流を授業の評価に生かし、指導と評価の一体化を図ることで、道徳的実践意欲や態度を育てることができた。（見通し3）

(1) 実践の概要

資料5のように、ワークシートへの保護者の記述及びそれに対するコメントを道徳通信に掲

載していった。

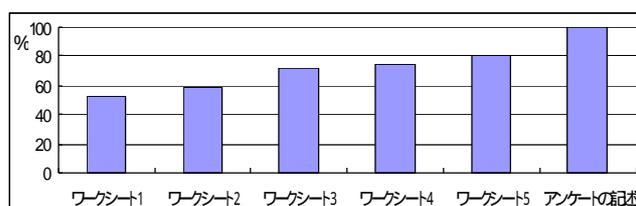
資料4 道徳通信に掲載したワークシートへの家の人の一言とそれに対するコメント

	「家の人の一言」の記述の例	それに対する教師のコメント
通信1号	(事前アンケートの結果及びその考察の記述・プログラムの概要説明)	
通信2号 「水のつ ぶやき」	ホカホカ言葉やチクチク言葉という表現がわかりやすく、家でも子供と話し合ってみようと思いました。	お家で話し合っていただけというのがとてもいいなと思いました。道徳プリントや学校からの様々なお手紙等を持ち帰った時に、それをきっかけに、学校のこと、普段の生活のこと、いろいろ聞いてあげてみてください。
通信3号 「心のこ とば」	体験を通して、相手を思いやる心が育ってくれるように願っています。 心を人に伝えることは大人でも難しいことです。子供の頃から学ぶのはよいことですね。	こういった記述が多かったです。頭で理解していても、体験しないとわからないことって多いです。日常生活でも、たくさん思いやりの体験をさせてあげられるといいなと思います。 本当の優しい気持ちを、誤解されることなくまっすぐに伝えられたら、また、誤解せずにまっすぐに受け止められたら、とても幸せに暮らせると思うのです。
通信4号 「文字を 書く喜 び」	「自分を大切にできる心」を読んでうれしくなりました。お母さんも毎日努力していることです。「一緒に頑張ろうね!」と話しました。	「自分を大切にするために、自分にできることを一生懸命に頑張る。」星野さんから学んだこのことをずっと覚えていてほしいです。親子で一緒に頑張ろうと励まし合えるなんて、素敵ですね。
通信5号 「この腕 が動いた ら」	家族を思いやる温かい気持ちを感じました。私も、子供と一緒に家族を思いやる温かい心を大事にしたいと思います。 感謝の気持ちを、言葉・態度などで素直に伝えることができれば、お互い幸せを感じることができるのだと思います。	家族同士の思いやりにより、子供たちの心について豊富な思いやりの心が育っていくのですよね。 そういう幸せをみんなにたくさん感じてほしいと思っています。
通信6号 「花さき 山」	思いやりの心は人として最も大切なことだと思います。思いやりの心が伝わり、そこに思いやりの心が生まれ、また、伝わり・・・世界中に花のじゅうたんが広がったら素敵ですね。 今までの道徳の授業で、子供の行動が変わったように感じます。私のしつけの面でも助かりました。	「花のじゅうたん」という発想が素敵・・・こういう感性が人の心を豊かにしていくのだと思います。 子供たちが良い方向に変わるのに、少しでも役に立てたのなら、それが何よりもうれしいことです。みなさん、どうもありがとうございました。

(2)結果と考察

資料5で、道徳通信の発行を重ねるごとに、保護者の記述の内容が充実してきており、分量も増えてきていることがわかる。また、図9は、家の人の一言欄への記述の割合の推移を表したグラフである。ここの記述は、サインのみの家庭もあるのだが、回を重ねるごとに文章記述をする家庭が増えていった。最後のアンケートに至っては、自由記述欄に全員が文章記述をした。これは、通信を読み、「家の人の一言」の大切さを認識したからと考えられる。

図9 家の人の一言の記入の割合の推移



資料6は、道徳通信に対する保護者の感想である。「ワークシートで話し合うきっかけになった」、「通信で他の保護者の考えを知ることは参考になった」、「ワークシートや通信がなければ、道徳の授業について知り得なかった」という記述が多くあった。こういった評価や、資料7の波線部分の記述にある授業に対する評価を、次回の授業に反映させていくようにした。

最後のアンケートでは、ワークシートへの記入と道德通信の発行について、100%の保護者からその有効性を認める回答が得られた。このことから、本研究における、ワークシートや通信は保護者・子供と教師との心を響かせ合うことができ、子供の道徳的実践意欲・態度を育てるのに有効に働いたと考えられる。

資料5 保護者の通信への感想

ワークシートの文字は偉いと感じます。今までは自分と子供の出来事「自信が持てたよ」が、自分の好きなように書いていたけれど、表現も丁寧でいい感じがします。

道德って一言でいってどういふかわかりにくい教科で、とくに重要で親の役割も大きいと思う。生きていく上で「成長する」とも重要な事がたくさんある。『何事か』も忘れない。周りの人の分岐点もあつたからこれに気づく事はいいです。また、この通信の強さを感じて、最初は「感想」もみんな書く事がいいかな。

理由・様子 日頃から、道德については色々話しているつもりでしたが、ワークシートをもう一度、私も学ぶ事ができ、家族で話し合う事ができました。

毎日、忙しい生活の中で、子供の学校の様子や気持ちを知ることができ、親としても勉強になる。学校で「偉い」を褒めたり、計算を褒めていくのは、子供にとっていい。人として、大切なのは「道德」が、子供にとっていい。子供達に「どうして偉いのか」を聞いてみる。その時、自分の「偉い」を、人への助け、やしてあげてほしいです。

4 「思いやりの心」を伝え合う力を育てる事ができたか（見通しまとめ）

(1) 役割取得能力測定テストの結果から

図10は、プログラム実践前と実施後の役割取得能力テストの結果のグラフである。実施前は「対人理解」「葛藤解決」「役割取得」の3つの項目ともに期待値1.8に及ばなかったが、実施後は期待値に近づいた結果が得られた。このことから、このプログラムの実践を通して、子供たちに役割取得能力（思いやり）が育成されたと考えられる。（役割取得能力テストの詳細については資料編参照）

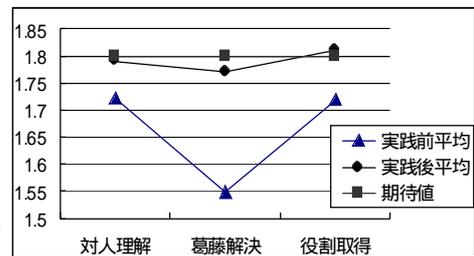


図10 役割取得能力測定テスト結果

(2) 事後アンケート及びSD法による学級の雰囲気測定テストの結果から

図11は、プログラム後に子供たちにとってアンケートのうち、本研究にかかわる項目のみをグラフにしたものである。グラフからわかるように90%近くの子供が「気持ちを伝えられるようになり」、「友達にやさしくできるようになった」と感じている。また、「周りの友達が優しくなった」と感じている子供は97%である。

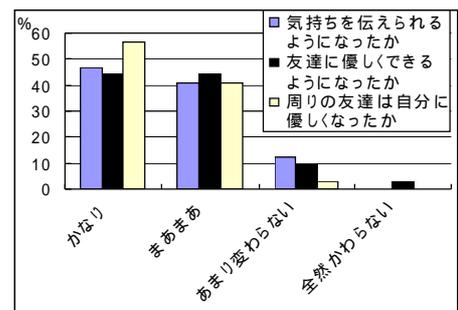


図11 事後アンケートから

また、図12は、SD法による学級の雰囲気測定をプログラムの実施前と実施後に行った結果のグラフであり、いずれの項目の数値もあがっている。

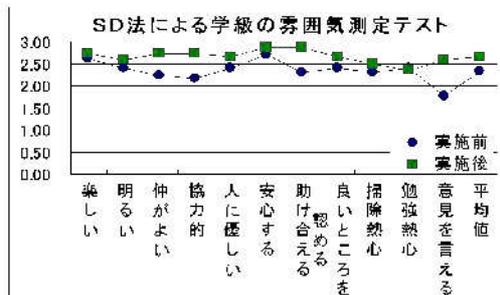


図12 学級の雰囲気測定テスト

これらのことは、思いやりの心を伝え合う力が育っていることを表していると考えられる。

(3) 子供の記述及び行動から

思いやりの心を伝え合おうとしていることは、子供の記述にたくさん表れている。資料7の記述はその例である。特に、ここには「誰も気づいてくれなくても、どこかで助かっている人がいると思えば頑張ることができる」という無償の思いやりの心を深く理解し、実践しようという意欲が出ている。

実際、子供たちは思いやりの心を素直に伝え合えるようになっており、友達のよさを素直に認め合う雰囲気がある。図13のように、花さき山の花も増え続けている。

このことから、本実践により、研究のねらいは達成されたと考えられる。

資料6 プログラム終了後の子供の記述

これから、もっともつと花さき山にお花をさか
かせたいです。わたしがかさかせるお花の
色は、たれもかかせたことのない色のお花を
さかかせたいです。本当の持ちにたれもさか
すていなくてもどこかで見つかる人か
いると思えばかたはらてきるし思う。

研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

「思いやりの心を理解する 心を伝え合う方法を学ぶ 思いやりの対象を広げる」というステップを踏んだ道徳プログラムを構想し、実践することにより、子供たちは徐々に思いやりの心の概念を広げていくことができ、子供たちの道徳的理解を促すのに有効であった。各授業において、資料提示の工夫と体験活動の工夫を取り入れることにより、子供たちにとって魅力ある心に響く授業となり、子供たちの道徳的心情を高めるのに有効であった。ワークシートや道徳通信・心のノートを活用し、子供及び保護者との意見交流を授業の評価に生かし、指導と評価の一体化を図ったことは、保護者の意識改革に大いに役立った。保護者の気持ちを変えることにより、子供たちの姿も確実に変わっていき、子供たちに道徳的实践意欲や態度を育てることができた。以上、～より、今回の実践で子供たちの道徳性を高めることができ、思いやりの心を伝え合う力を育てることができた。



図13 増え続ける花

2 今後の課題

今回は限られた時間内での実践であったが、実際には子供の実態に合わせて、各ステップの授業にもっと時間を要することも考えられる。そこで、以下のことを教育現場で続け、実践し、研究を深めていきたい。

各ステップに適する体験活動と結びつく資料の開発
低学年・高学年における実践プログラムの具体的な構想

<主な参考文献>

- ・文部省 『小学校学習指導要領解説 道徳編』 (1999)
- ・押谷 由夫 著 『道徳教育新時代』 国土社 (1994)
- ・渡辺 やよい 編集 『V L Fによる思いやり育成プログラム』 図書文化(2001)
- ・伊藤 啓一 編著 『「思いやり」の心をはぐくむ道徳授業』 明治図書(1998)
- ・諸富 祥彦 編著 『エンカウンターで道徳』 明治図書(2002)
- ・村田 盛清一 著 『人間讃歌の道徳教育』 日本教育新聞社(2001)
- ・深澤 久 編著 『子供が本気になる道徳授業』 明治図書(1996)
- ・児童心理臨時増刊号 『実践友だちづくりハンドブック』 金子書房(2003)
- ・國分 康孝 著 『エンカウンター』 誠信書房(1981)
- ・斎藤 孝・山下 柚実 著 『五感力を高める』 中公親書ラクレ(2002)
- ・教育技術MOOK 『子供の夢を育む道徳授業の新しい展開』 小学館(1995)